

Akatake Times

Vol. 44
(通算 第197号)

50th
ANNIVERSARY



『原点』

この9月をもちまして、当社は50周年を迎えました！
当社が『赤武エンジニアリング株式会社』として産声を上げてから半世紀、その創成期を支えたのは写真のようなプレハブの事務所と、製品でごった返す工場でした。
この礎があって今の当社がある訳で、畏敬の念を抱かずにはいられません。
セピア色の写真の中にしっかりと残る当社の“原点”を心に焼き付け、
その目は次の50年を見据えながら、地に足の着いた「ものづくり」を通して社会に貢献していきましょう！
目指せ100年企業！

日本国内はコロナに振り回されている感があります。
いつどこで感染してもおかしくない状況で、なんだか精神的にも暗くなってしまいますね。
でも絶対に負けられない戦いなので、一人一人が感染しないように気を付けて
生活していくしかありません。頑張りましょう！！

今回は二つの話を用意してみました。どちらも粉体工学技術と関連のある話になります。

◆「おから」

私は知らなかったのですが、「おから」は産業廃棄物に認定されているようです。
その産業廃棄物となる「おから」を出さない、大豆を丸ごと使った豆腐作りに成功した企業が、
TVで取り上げられたことがあります。アイデアと粉体工学技術の連携が生み出した新豆腐であり、
あらためて産業界における粉体工学技術の重要性を再認識する出来事です。

では、どのようにしておからの出ない豆腐を作るのか？

答えは簡単で、これまで大豆を絞っていたために、残りかすが出ていたのだから、
大豆をすべて豆腐に使用すれば良いのです。大豆をすべて使った豆腐は、開発当初「粉っぽい」と
評価が低かったようです。そこで生大豆を独自の粉碎技術により、大豆の風味を損なわないように、
粒の形状を丸く、更に μm のオーダーまで微粉碎して、粒子サイズのそろった「大豆粉」を
完成させました。

この粉を使用すると、豆乳も簡単にでき、豆腐の製造工程時間が短縮化し、
もちろん産業廃棄物であるおからも出なくなりました。そればかりか、濃厚で大豆の栄養が
濃縮された「おいしい豆腐」になったそうです。何度もあきらめず工夫した粉碎技術により、
今までにない豆腐が完成し、今では海外にも出店し、
世界規模に展開している様子が報じられていました。

まだ我が家の食卓で普通の豆腐との
食べ比べをしたことはありませんが・・・。

研究開発には「発想の柔軟性とあきらめない気持ち」が
重要であり、そこに最新技術が加わると、
一気にブレークスルーが起こる。

この事例は、粉体工学技術が実学と結びついた
好事例であり、研究開発には産官学の連携が
重要であることが実感できます。



◆「胡粉」

「胡粉(ごふん)」という言葉をご存じでしょうか？胡粉は白い顔料であり、ハマグリ、カキ、ホタテなどの
貝殻から作られるようです。貝殻を天日にさらし、長い年月をかけて風化させる。
そしてこれを粉碎後、水で溶き、粘土状になったものを板の上に延ばして、さらに乾燥等の工程を経て
作成されます。作られた胡粉は、日本画や日本人形の絵付けの基本となります。

我が国最古の胡粉業者は、京都市下京区燈籠町にある「上羽絵惣」だそうで、
創業が宝暦元年(1751)ということです。1200色以上の色を取り扱っているそうですが、
日本画を取り巻く環境は厳しく、現在胡粉を扱う業者は、全国でも数件程度だそうです。
そこで同社では、胡粉を新分野に応用するための新たな挑戦として、2010年に水溶性の
胡粉ネイルを開発しました。胡粉ネイルは天然素材から作られており、有機溶剤を使用しないため、
爪に優しく、マニキュア特有の刺激臭がなく、速乾性と通気性があり、アルコールで落とせる
ものだそうです。そのため、従来のマニキュアが使えない妊婦や高齢者などにも使用可能であると
言われているようです。別の見方をすれば、日本画のキャンパスを女性の爪に求めたものであり、
日本古来の伝統が新しい形で発展していく、一つのモデルであるとも言えます。

考えてみれば、我々の身の回りには伝統的な品々は、天然物を何らかの方法で粉碎、
調合して作られたものが多いです。

粉体工学は、我が国の古くからの文化を
発展させる基盤としても、重要な役割を
果たしていると思います。



常務取締役 秋元 祐



irodori

受付に華やかさを添える生け花。

今回は、2021年6月～7月に生けた花の中から、選りすぐりの1点を選んでいただきました。



- ✿ ホオズキ
- ✿ エリンジューム
- ✿ ドラセナ



ビジネス用語

『 Pending 』

ペンディング

ビジネスにおいては、“保留”、“未決定”、“先送り”などの意味で使われる言葉です。英語のPendingは「宙ぶらりん」の状態を指すことから、転じて保留のような意味で使われるようになったものです。

保留や先送りのような表現はネガティブなイメージになりがちですが、ペンディングと言えば何となく印象も変わり、仕事してる感も増す気がするので、使いたくなります。和英どちらを使っても問題はないのですが、気を付けなければならないことがあります。それは、必ず期限を決めておくことです。期限も決めずにペンディングにすると、そのまま放置され、いずれ立ち消えてしまいます。

「〇日までに処理」、「次回の会議でまた打合せ」など期限を明確にし、いつまでもペンディングのままにならないようにしましょう。

